

『西オーストラリア紀行―癒しを求めて 8000 ㎞』

～パース・ピナクルズ・ウェーブロック・フリーマントル・ロットネスト島周遊』

“西オーストラリア・美しきパース 6 日間”

〔クラブツーリズム 15421〕

出発 平成 21 年 12 月 30 日（水）

帰国 平成 22 年 1 月 4 日（月）

添乗員（TC）：棟居真遊さん

12 月 30 日（水） 晴れ

日暮里駅でハワイに行くという後輩の神原君夫妻と遭遇し、15 時 45 分のスカイライナー35 号では彼らと話しながら楽しく過ごし、あっという間に成田第 2 ターミナルに到着してしまった。

集合時刻の 18 時 05 分少し前に北団体カウンターに行くと、そこには TC の棟居真遊（むねすえまゆ）さんが笑顔で待ち構えてくれていた。まだ入社 2 年目の若くてかわいい、伊東美咲似の目の美しい方であった。

Duty Free で買い物をしてから搭乗口に向かうと、報道関係者と思われる人がカメラを抱えて待機していたが、芸能人を待っているんだなあ…誰だろう？ 20 時過ぎから搭乗が始まり、QF80 便は少し遅れた 20 時 50 分に Departure となった。

リクエスト通り、少し広くて足が伸ばせる非常口脇の指定座席に座れたが、隣が大柄な男（オージー）で、機内食の際に窮屈そうに食べていると、CA から誰も座っていない前の席に移動していいですよと言われて一つ前の非常口座席に移った。食後はすぐに眠ったのだが、他の男の乗務員から、この席は一般の方は座れないので違う座席に移ってくれ、と起こされてしまいちょっとムツとしたが、面倒なので素直に従って近くの座席に移動して眠ることになった。

12 月 31 日（木） 晴れ

早朝 5 時 50 分、1 時間の時差があるのでジャスト 10 時間、8000km のフライトの後、パース国際空港に到着となった。

入国審査を終えると、空港のトイレで夏の衣服に着替え、7 時にバスに乗車となった。強い陽射しに、寝不足の頭がクラクラするのを感じた。現地ガイドの恵美子さんは僕よりも少しお姉さんで、こちらに来て 20 年ということであり、陽気でちょっとファッティーなジェニーは、この道 20 年になるベテランドライバーで将にアラフォーという感じであった。

こちらではドライバーのことをコーチ・キャプテンと呼ぶということから恵美子さんの話が始まり、次のような注意があった。オーストラリアではバスの

シートベルト装着は強制であること。日本の 21 倍の大きさがあり、気温差が大きいこと。因みに、今日のパースの最高は 28℃、最低は 14℃であるが、2 日前は最高 40℃近くになり、1 週間前には 43℃にもなったということであった。紫外線も日本の 3~5 倍にもあるので、帽子や日傘は必須であること。また、都市部では大丈夫だが、田舎ではミネラル水（\$ 2~3）を飲むように…。

また、オーストラリアの通貨について、1 ドルは 80~90 円で、¢ 100 が\$1 で、\$5 以上から紙幣となり、\$1 と\$2 コインは金貨である等々…。



（機内から見えた美しい朝焼け～嬉しい予感！）



（スワンバレーのぶどう畑）

そうこう話しているうちに、バスは北に向かって進みギルドフォードの町に入った。この町は 1827 年から開拓が始まり、農業、特に野菜作りを中心として町造りが行われたということである。1917 年に造られた大陸横断鉄道の線路があり、短車両の通勤電車が走っていた。

ギルドフォードやカバシャム等のスワン川流域はスワンバレーと呼ばれ、西オーストラリア最大のワイナリー地帯となっている。道の両側には広々としたブドウ畑が広がっているが、この辺りは 1830 年から開拓が始められたということであった。

2 億年前に他の大陸と離れたオーストラリアで哺乳類から最初に分かれたのが有袋類で、250 種類にもなる有袋類の中で最大なのがカンガルー。袋を有しているのがメスで、オーストラリアには人口の 3 倍（6~8 千万匹）もいて、準夜行性なので、早朝と夕方に活発に動き回るそう。時々、野生のカンガルーやエミューが見られることもあるので、車窓を注意して見ていてくださいということも付け加えられた。

そのような恵美子さんの説明を聞いているうちに、ホワイトさんという方が寄付したという 4300ha の敷地を有するホワイトマンパークに進み、その中にあるカバシャム動物園（カバシャム・ワイルドライフパーク）に到着した。この動物園は 8 時開園なのだが、コーチ・キャプテンのジェニーが園長のデビッドと仲良しということで、15 分早めて入れることになった。

入口には、恐竜時代の生き残りの植物と言われるグラスツリーが、天に向か

って形をくねらせて伸びている奇妙な姿で迎えてくれた。



(グラスツリー)

(カバシャム動物園の入口)

(ウォンバットを抱くピーター)

マネキンのような感じのピーターさんの後について動物園を巡った。最初に見たのはブラック・クック・ドゥーという黒くて何気ない感じの鳥なのだが密輸すると 200 万円もするという。続いてカンガルーの群れがいて、その中でも白いカンガルーが目立っていた。突然変異で弱い種のため、自然では中々育たず、動物園の中でのみ見られるという。



(ブラック・クック・ドゥー) (白いカンガルーは遺伝的に弱い種なので、自然では少ない)

白いカンガルーの他、薄茶色いのがウェスタンカンガルーで、西オーストラリアに多く、色の濃い(赤っぽい)のがレッドカンガルーで、内陸部に多いということであった。



(おっぱいを飲む姿)

(小さめのカンガルーと)

(赤いユーカリは南氷洋沿いに咲く)

園内にはたくさんの植物もあり、500 種類以上あるユーカリの一種で、赤い花が咲いているのが美しく印象的であった。この赤いユーカリは南氷洋沿いに咲

くということである。



(カンガルーポー)



(ウォンバットは大きくて重たい～！)



オーストラリア全土の約 3 分の 1 を占める広大な西オーストラリア州の花であるカンガルーポー (kangaroo paw) は文字通りカンガルーの足という意味で、形が似ていることから命名されていて、赤くて可愛らしい姿がこの州にふさわしいと感じた。

ピーターが眠そうなウォンバットを抱えてきたので、一緒に写真に収まったが、このウォンバットは 11 歳で 26 kg もあるという (平均寿命は 20 歳位とのこと)。重そうなのと盛んにウンチをしていたので、抱っこはやめました～。



(ディンゴ)



(ワライカワセミ)



(エミュー)

ディンゴはインド狼が祖先と言われ、アボリジニーがオーストラリアに移住する際に一緒に連れて来たと考えられている。一部のディンゴはアボリジニーのキャンプで飼われ、残飯の処理や抱いて寝ることで毛布の代わりとして使われてきたという。ヒツジ等の家畜や農作物が襲われるため、多くのディンゴが駆除されたため、現在、野生ではエアーズロック周辺のみで生息しているが、イエイヌとの交雑が進んで、純血を保つものは少なくなっているとのこと。

手塚治虫の『ブラックジャック』に、「ディンゴ」というタイトルがあって、かつて白人たちが持ち込んだ犬が野生化してディンゴになり、フクロオオカミ (カンガルーの仲間) をはじめとする大陸固有種を絶滅に追いやったということが記されている。もう 40 年近くも前に発表された作品であるから、その説明だともう大雑把すぎるようで、いずれにせよ DNA 鑑定とかが無かった時代は、ディンゴの祖先もよくわかっていなかったのかなあと思われる。

ワライカワセミは本来オーストラリアの東部に分布し、人の笑い声に似た大声のさえずりが特徴ということであるが、このカワセミノの笑い声はそんな風に聞こえなかったなあ…、オーストラリア訛りだから？

ダチョウに似ているが、ちょっと小ぶりのエミューはオーストラリアの国鳥である。メスは卵を産むと他のパートナーを求めて行ってしまうので、オスが卵を温めて育てるということである。そのオイル（エミューオイル）はスキンケア製品としての効能の素晴らしさから近年にわかに注目されてきており、特にスポーツマッサージに適していて多くはアメリカに輸出されているというが、この動物園のおみやげコーナーにもしっかりと売られていた。



（左：頬にハエがたかって…中央：ナイスショット）（タスマニアデビルはお昼寝しちゃった！）

1日20時間も眠るというコアラは、起きてはいたけど何となくだるそうにしていた。コアラの好むユーカリの葉は栄養分に乏しく、活発な行動をするまでのエネルギーを得ることができないため、エネルギーの節約のためにひたすら眠るということである。また、ユーカリの葉からのみ水分を摂取し、地上に降りて水を飲むことはないが、コアラとは先住民の言葉で「水を飲まない」という意味だという。

“将軍”と呼ばれる大柄なボスのコアラが、隣のガーデンにいる“彼女”の鳴き声を聞いて、機嫌が悪くなってしまい、一緒に写真を撮れなかったのが残念である。この辺り全般に言えるのだが、ハエが多くて参ってしまった。上の写真では頬にたかられたが、湿った所（目や唇）にたかるので、煩わしいっらない！

タスマニアデビルは、肉食で家畜を襲う害獣として、また、入植した白人たちが夜毎山中から聞こえてくる声を「悪魔の声」のようだと言ったことから、さらには死肉を食べ、食べ物を争って仲間同士で喰い合ったり、光が当たると耳が赤く光ったりすることから“デビル”と命名されたという。顎の力はワニよりも強く、骨をも砕いてしまうとのこと。現在ではタスマニアのみに生息するが、古くは大陸にも広く分布していたそう。 “悪魔の” 呻き声を上げながら走り回っていたが、いざカメラを向けるとグッタリして昼寝に入ってしまった。これも残念！

8時55分に動物園を出発して、バスは昼食をとるセルバンテスに向かった。

鉱物資源が豊富な西オーストラリア州の日本への輸出は、①石炭②牛肉③鉄鉱石ということで、その他、アルミやニッケルやミネラルサンドと呼ばれるシリカ、ジルコン、チタン等が採れるということである。日本との貿易収支はトントンであり、日本からは自動車、機械、パソコン、ビデオ等を輸入している。特に自動車はオーストラリア仕様となっているのか、2割ほど高価であるという。

また、この州だけで日本の7倍もの面積を有し、人口は210万人。このうちパース近辺で130万人の人口があるという。1号線を進んでいくと、牛や馬の放牧、タンスやサーフィンの板の材料となる桐の林等が見られたが、ほとんどが原野という感じがふさわしい土地であった。



(車窓からの風景 低い灌木や塩湖が見られる)

途中に塩湖が見られたが、オーストラリアの内陸部の湖はほとんどが塩湖であるという。また、クリスマスの時期に黄色い花を咲かせるクリスマスツリーが、そこここに見られた。名前のイメージから、もみの木のようなものを連想したが、イメージとは大きく異なっていた。



(クリスマスツリー)

10時40分から15分間のトイレ休憩になり、ドライブインでアイスクリームとキットカット(チョコ)を購入したが…A\$11だって、**It's too expensive!** オーストラリアでは、街中より田舎の方が輸送費の分だけ高価になるという話だったけど、ボラれちゃったのかなあ…。

50基もある風力発電の脇を抜けて進んだが、パースで使われる水の3分の1は海水を真水に変換したもので、その電力のためにこの風力発電が利用されているという話であった。また、オーストラリアには原発はないということだ。

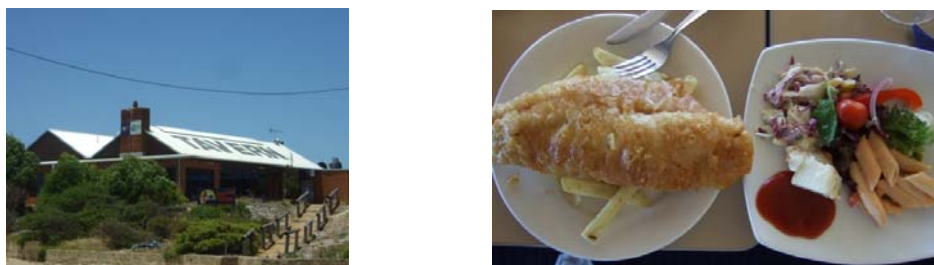
11時50分にインド洋に面したセルバンテスの海岸に到着した。アメリカの沈んだ捕鯨船の名に由来しているというセルバンテスの町は、人口200人ほどの寂しい漁師町で、半分くらいの建物はパースの人のセカンドハウスということである。

無人のビーチは、海水が暖められて陸に向かって吹く西風（シーブリーズ）が強く、帽子が吹き飛ばされるくらいであった。強い陽射しにもかかわらず、シーブリーズのおかげで気持ちよかったあ！そして、いかにもインド洋！という感じのコバルトグリーンの輝きがまぶしく、心が癒される印象的な光景であった。この辺りからインドネシアにかけては 16 世紀のジャカルタの旧名からバタビアンコーストと呼ばれていたというが、こんなにきれいな海なら、船で北上してみたい思いに駆られた。



（無人の海岸はちょっと寂しかったが、コバルトグリーンが美しかった！）

TAVERN という店でボリューム満点の白身魚（サメ）のから揚げの昼食となったが、お腹がペコペコだったので一気に食べてしまった（そのため、後からちょっと胸やけがした～(*_*)）。食後はすぐ近くにあるポストオフィスで日本宛のスタンプ（1 枚 A\$1.4）を購入した。



（TAVERN という店とボリューム満点の昼食）



（砂漠の中にある奇岩群ピナクルズは思ったよりも小さかった）

13 時 20 分に出発して、一路、パースの北約 250 km のナンバナン国立公園にあるピナクルズへと進んだ。砂漠の中に林立する不思議な奇岩群（大小数千本の石灰岩の柱）がピナクルズである。英語で先の尖ったものをピナクスズとい

うことから名付けられ、50 万年前（5 万年前という説もある）頃から、深く根を張った原生林がブッシュ・ファイアー（山火事）等で枯れた後に砂漠化し、根の間に残った石灰岩層が浸食されて出来上がっていったという。「荒野の墓標」という紹介コメントが付けられているそうだが、将に、砂漠の中にたくさんのお墓があるように見え、最初に発見した人は、さぞや驚いたことであろう。



（岩の間から顔を出して撮影する場所は名物スポットということだ）

トルコの Cappadocia のような感じを想像していたのだが、一つ一つの奇岩が小さくエリアもそれほど広大ではないので、ちょっと違和感を覚えた。40 分かけて見学したが、風（シーブリーズ）が強くて帽子が飛ばされてしまうほどであった。風のせいでハエが内陸方面に飛ばされ（流され）てしまい、今日は少なくてラッキーですねと恵美子さんから言われたが、話をしていたら口の中にハエが飛び込んできたのには閉口した。また、帽子といえば、7～8 年前に風で飛ばされてしまったツアー客の帽子を取ろうとした添乗員さんが、エアーズロックで落下死してしまったという話も伺った。

徒歩での観光を終え 14 時 30 分に出発すると、この辺りの砂は日本に輸出されて砂浜に撒かれたり、ゴルフ場のバンカー用として使用されたりしているという説明があったが、確かに、粒が細かくてサラサラした白い砂はバンカー用として最適であろう。

ナイトフライトで寝不足のために、しばしお昼寝タイムとなり、16 時にドライブインに停まってトイレ休憩となった。ここではエミューが飼われていて、うろうろ歩いている姿を見ることができた。



（2羽のエミューがうろついていた）

バスが走り出すと、西オーストラリア州とパースについて、恵美子さんからの詳しい話が始まった。この州では日本より 1 年早く小学校に入学し、小学 7

年制であり、その上が6年制のハイスクールになっているという。1月末に新学期が始まり、12月10日頃に学年が終了するということだ。

また様々な人種が住んでいて、外国生まれが3分の1位いて英国人が多く、特にフリーマントルにはイタリア系が多く、その他ギリシア系も多いということであるが、これは第2次大戦後、イギリスがヨーロッパからの移民政策を奨励したためだという。アジア系では、日本人がパース周辺に5千人程、そしてどこに行ってもだが中国系が圧倒的に多いということである。また、ベトナム戦争の時に難民として入ってきたベトナム系も1万人位いるということであった。

パースの住宅事情は、少し前までは2千万円位で500㎡程の土地付き一戸建てを買えたが、ここ数年のバブル景気で4500~5000万円位まで跳ね上がっているということである。水辺とかのちょっといいロケーションだと1億円にもなってしまうそう。天然ガス・電気料金は安く、ガソリンも日本よりは少し安めということである。

最低賃金は高く、時給1200~1300円。メディケアー・カード（国民健康保険）により、公立病院だと負担金はゼロだという。私立病院だと3割程の負担金がかかるということだが、公立病院だと順番待ちがあったり、いい先生に当たらなかったりするケースもあるので、私立病院にかかるための医療保険に入っている人も多いという話である。歯科はすべて保険対象外ということであった。

17時20分になると、パースの北部の新興住宅地に到着したが、きれいな平屋の家々が整然と建てられていた。高速道路に入ると上下線の間には広い空き地があって、そこを鉄道が走っていた。パースの近郊から市街地へ向かう通勤用の電車ということである。



（市街地にはサーカスが来ていた）



（アイビスホテル）



（陽気なオーギーと）

パースの名前は、当時のイギリスの植民地大臣の選挙区がスコットランドのパースであったことから命名されたという。平成8年にパースに行ったことを恵美子さんに話すと、ちょっとビックリされ、スコットランドのパースに行ったことがある人には…初めて会ったと言われた…(^^)v

美しい街なかの広場にはサーカスのテントが張られていて、余裕のある街造りが行われたように感じられた。

18時にホテル（アイビス）に到着。18時30分からホテル1階のレストランで夕食（オーギービーフのステーキ）となった。ミディアムレアで焼いてもらっても噛みごたえのあるステーキを多咀嚼して何とか食したが、ウェルダンにした方は大変だったよ！まるで炭のようでした～！

19時50分になると、オプションのパス夜景観光ツアーに出発した。ガイドの池田朋子さんは元JALのCAだったという背が高く、スラリとした美しい方で、なにやらワクワクしてしまうツアーとなった。まずは、オーギーの女性の平均サイズは13～15号とか、こちらの自動車についての話から始まった。

オーストラリア仕様の自動車（強い紫外線対応のためにガラスが厚いとか）は日本よりも2～3割高いということである。彼女が10数年前にパスに来た時に、最初に購入したのが日産パルサーで、アパートメントの隣人が日産のセールスをしているという縁で購入することになったそうだ。それが新古車ということだったのに、すでに2万^キも走行していて200万円もしたけれど、その後、彼女が13万^キまで走って売ったら80万円にもなったということであった。トヨタカムリとカローラはこちらの工場生産されているというが、確かにパス市内にはカムリが目立った。

また、パスは鹿児島市と姉妹都市になっていて、これから行くカジノの隣にはカゴシマパークと名付けられた公園になっているという。鹿児島といえばナポリと姉妹都市で街中にはナポリ通りとかあり、ナポリにも鹿児島通りとかあるのに、いくつも姉妹関係を結んでいるんだね！と考えているとパスウッド・カジノに到着した。ここはオーストラリア最古・南半球最大のカジノで、インターコンチネンタルホテルや劇場、ディスコなどたくさんの施設が集まって賑やかであった

朋子さんの後についてカジノに入り、よく分らないままいくつかトライしたが、得意の？スロットマシンがないので盛り上がりず A\$2 負けてしまった。混雑したカジノを30分程で引き上げ、ウィンザーホテルのオーギーパブに行き、陽気なオーギー達に混じってビールを飲んだ。おつまみ無しに、ひたすらアルコールを飲むオーギー達は、みな強かった！

ニューイヤーズイブというのに街は静かで自動車も少なく、普段の夜だったらパスの夜は寂しいくらいに静かであることを予想させる雰囲気であった。

大晦日ということで道路が一部規制され、われわれを乗せたバスは少し遠回りしてキングスパークに到着となった。朋子さんから南十字星、ニセ十字、日本とは逆さのオリオン座等の説明を受けながら美しいパスの夜景を堪能した。ニューイヤーをこの公園で迎えるために、たくさんの人たちが集まっていた。

元気だったら、僕もここで新年を迎えるのもいいかなあ？と思ったけど（でも一人じゃ寂しいよォ～）、寝不足の1日目からビッシリの日程で、かなりグッタリでした。

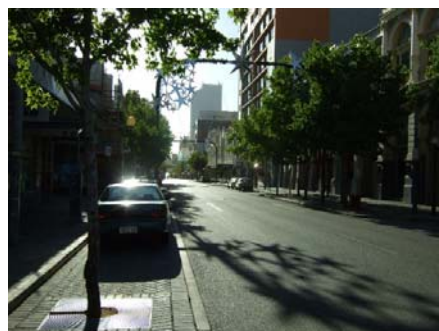


（キングスパークからの美しい夜景）

ホテルに戻ったのは22時15分過ぎ。本当に疲れた長～い1日でした。

1月1日(金) 晴れ

6時過ぎに、なんと！TCの真遊さんからの直接のモーニング・コールがあった（ホテルの装置にミスがあって、彼女自らが全員に電話しまくったとか！）。



（閑散とした元旦の朝のパース ムーレー通り）

7時半過ぎにバスは出発したが、恵美子さんによると、昨晚は15℃まで下がったが、今日は30℃くらいまでいってちょっと暑くなるという話だった。

1829年にパース開拓に尽力した英国人ステアリング船長の像を見ながら、スワン川を渡りグレート・イースタン・ハイウェイを東に向かって進んでいった。昨夜行ったバースウッドのカジノを過ぎると、パースの隣町ベルモント市に入ったが、ここは足立区と姉妹都市になっていてアダチパークという公園があるという。因みに、4日目に訪れるフリーマントルは横須賀市と姉妹都市になっているということである。カゴシマパークとかアダチパークとかがあんなら、フリーマントルにはヨコスカパークがあるのでしょう、きっと（笑）

オーストラリアは競馬が盛んで、各地にレース場が存在しているとか、全土に広く分布しているユーカリはオイルが豊富なのでよく燃え、しばしば山火事

(ブッシュ・ファイアー) が起こっていること等の、恵美子さんの説明を聞きながら、9時にヨークという小さな町に到着した。

スワン川の源流であるエイボン川が町なかを流れ、イギリスのヨークシャーから来た人々によって1830年代から開拓されたこの町は、本当にちっぽけで寂しい感じであった。予定していたカフェがクローズであったので余計にそう感じたのかもしれない。しかし、コーチ・キャプテンであるジェニーの知り合いの店で何とかミルクティーにありつくことができた(ジェニーはいろいろと顔が広い!)。20分ほどのティーブレイクの後にバスは再びグレート・イースタン・ハイウェイを東に進んだ。



(人がいない寂しいヨークの町 元旦の朝だから? 歯科医院もあったけど…)

休日ということもあつてか、ほとんど車の通らない道を進んだが、現地ガイドの恵美子さんは、バスの走行中、延々と話をしてくれた。西オーストラリア州にはフライング・ドクターというシステムがあつて、日本の7倍の広さを7か所の基地から飛び立つ医師らが、州民の健康・生命を守っていて、水とフライング・ドクター制度は、当地にとって無くてはならないものになっているという。また、昨日のピナクルズにもいたが、少し小さい大陸バエは湿ったところ、目や唇とかにたかってくると、改めて注意された。

10時半に1907年に入植が行われたクアラディニングという町を通過したが、右手に大きな小麦用の倉庫が3~4個ほど建てられていた。これらの小麦は、現在、中近東が最大のマーケットになっているということだ。



(途中にはたくさんの塩湖が見られた)

干上がった塩湖もいくつか見られたが、周りの草は塩に強いソルト・ブッシュのみで、その周辺は塩分によって農業には向かないという。

11時になるとコリジンの町に到着した。町といってもほんの数軒の建物があ

るのみだが、シープドッグ（羊の番犬）を家族の一員のように大切にしている、しっかりお墓まで作ってしまう犬を愛する町として有名とのこと。このドッグセメタリーの由来は、1974年にストライクという犬が無くなったときに作られたお墓の周りに、愛犬家たちがお墓を作っていった今規模になったそうだ。



（コリジンの町にあるドッグセメタリーとキャンプ場の案内板）

また、この町は犬を乗せたトラックの隊列走行でギネスブックに登録され、1998年には699台で約7キロもの隊列を作ったという。



（ロードハウスのトラックのドライバーシートには犬が！）

コリジン周辺は世界的な小麦の生産地帯で、はるか地平線の彼方まで延々と小麦畑が続いているのでフィートベルトと呼ばれているそうだ。



（地平線まで延々と続く小麦畑と牧草地）

キャプテン・クックが来た時、250 くらいの言葉の異なる種族がオーストラリアにいたということだが、4～6 万年前から居住していると言われる原住民アボリジニーは、現在、全体の2%、50 万人ほどいて、豪政府に対して、自分たち固有の土地を返還して欲しいという訴えを起こしているそうだ。彼らは文字を有していなかったのが、すべて伝承なのだが、彼らにはドリームタイムという神話が存在するという。

また、この辺りにはハイデン・ロックと言われる大きな岩が存在しているが、

気温差が大きいので、その岩に水滴が溜ってクサやコケが生え、それを目当てに動物が集まってくるので、アボリジニーはそれらを捕獲してタンパク源としている。それゆえ、これらの岩場はアボリジニーの聖地になっており、エアーズロックもそのようなものの一つとであるいう。

そのような話が続けられているうちに、12時40分、ハイデンの町に到着となった。町といっても、ガソリンスタンドやモーター等、少しの建物しかなかったが…。

ほどなくして、13時からマルカの洞窟の見学となった。内部には、かつてこの周辺に住んでいたアボリジニーによる、手形跡や動物を描いた壁画（ハンドペインティング）が比較的鮮やかな色で残されていた。



（マルカの洞窟の内部と手形跡）

この洞窟に関しては、アボリジニーの哀しい伝説が残されている。禁断の恋によって生まれたマルカは生まれつき目が悪く（斜視であったという）、生活に不可欠な狩りが下手なために仲間はずれになってしまった。そこで部族から離れた洞窟で一人暮らしを始めてヒモジク暮らしていたが、あるとき部族の幼児を連れ去って、その肉を食べてしまった。マルカは同じ部族に捕まって殺されてしまったという。

このような不浄な伝説のため、他の部族もこの洞窟周辺を避けて移ってしまっているそうだ。部族といっても、アボリジニーの場合は数家族単位の小さなコロニーからなっているということである。



（トカゲ？の壁画）



（洞窟の脇にあるマップ）



（洞窟の入口は狭い）

その後、ワイルドフラワーショップでチキンのから揚げのランチ。お米がポロポロでとても不味かった！日程表ではバーベキューメニューということだっ

たのにイ〜。このショップの天井には、この付近で採取された花々がドライフラワーとして飾られていたのだが、なんか花粉が降ってくるような不安にかられて、ちょっと落ち着かなかった。また、裏手にある小さな池には、黒鳥が窮屈そうに泳いでいた。

ランチの後、14 時 15 分からウェーブロックの観光となった。花崗岩からできたこの不思議な岩の前に立つと、あたかも波が押し寄せてくるような感じになり、大自然の不思議さに思わず言葉を失ってしまう程であった。高さ 15m、長さ 110m の大岩は 27 億年前に誕生し、気象条件の変化と浸食によってこのような特徴的で鮮明な模様になったという。30 年ほど前に旅行者の撮った写真がアメリカの地質学雑誌の表紙を飾ったことで、その存在が広く知られるようになったとのことである。サーフィンをしているような感じで写真を撮りたかったのだが、左足が滑ってきてしまうので、この体勢は結構つらかった！



(鮮やかな縞模様は年輪のよう！ 左の白い部分は強〜い直射日光が当たっている所)



(滑りながらも何とか踏みとどまって！ 上に登るとこんな感じに見えます)

階段を上って、右手に小さなダムを見ながらウェーブロックの上に登ると、アフリカのサバンナと言うか、モロッコのオアシス付近の感じというか…そんな広大な風景が広がっているのを見ることができた。彼方にはマルカの洞窟のある山も望むことができた。



(彼方の小さな山にマルカの洞窟がある 雄大な風景はオーストラリアの広さを実感できる)

手前に輝くエメラルドグリーンは塩湖で、抜けるような青空と木々の緑に反映する雄大な景色に心が癒され、何故かホッとする気持ちになった。ウェーブロックの上には、大きな岩がいくつか転がるように置かれていたが、このようなものが何故ここにあるのか不明だという。氷河期に流されてきたものだろうか？



(大きな岩があったけど…何故ここに？ カバがアクビをしたような形の岩、ヒッポズヨーン)

15時にバスに戻り 5分ほど揺られた後に、ヒッポズヨーンに立ち寄った。この岩はウェーブロックの端に位置し、えぐられた巨岩があたかもカバがアクビをしたような形になっている。この辺りはシーブリーズが届かない内陸部なので、午後になるととても暑かった。

以降はひたすらバスに乗り続け、350kmのロングドライブとなり、一路パースを目指した。



(ロードハウスにあった看板)

16 時 25 分から 15 分間、コリジンのロードハウスで休憩となった。その際、赤い部分にはパースやハイデンまでの距離と時間、真ん中には犬を乗せたトラックの絵、そして下部は現在地を表す黄色い地図、から成る面白い看板を見つけた。コリジンは犬（シープドッグ）を大切にしている町であることが、改めて実感できた。

再びバスが発進して少し行くと、前をウサギが横切って行った。すかさずガイドの恵美子さんから、この辺りにあるラビットフェンスについての説明があった。草地の少ない西オーストラリアにウサギが入ってくると、少ない草を食べ尽くしてしまうので、南北 4000 呎にわたってフェンスを設けたという。それでも穴を掘ってフェンスを越えたりするので、さらに 4000 呎のフェンスが造られたという。しかし、エミューとか他の動物の移動ができなくなるという問題も生じてしまっているとのことである。

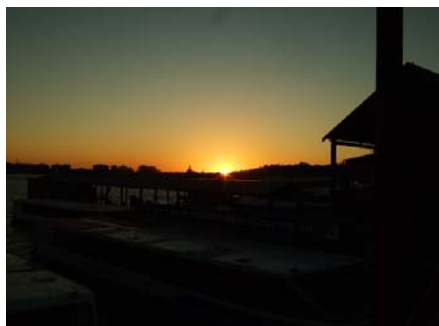
退屈しのぎのため？バスの中ではジョン・ウィリアムズが歌う、オーストラリアの応援歌ともいえる「WALTZING MATILDA」が流れ—これは、我々に聞かせようと、恵美子さんが先ほどのロードハウスで CD を購入してくれたもの—続いてオーストラリアに関するクイズが行われた。オーストラリアでは人よりカンガルーの方が 3 倍多いとか、オーストラリアの意味は“南の方”という意味とかをクリアして勝ち抜き、僕は最後の二人に残ることができたが…。オーストラリアの花は①アカシア②ユーカリ③クリスマスツリーという問題で②ユーカリと答えてしまい×…（正解は①アカシア）結局、全問正解者は一人もいなかったのもので、ご褒美は無しでした。

この日はバスが一番前方の席（ガイドさんのすぐ後方の席）に陣取ったので、恵美子さんからいろんな話を聞くことができた。先輩の岩田先生からラミントンを買ってきてと言われているので、クイズの後に聞いてみると、ココナッツのついたカステラであるラミントンは、この国ではポピュラーなお菓子であり、チョコ味やストロベリー味があるが、プレーンが一番！と強調された。

また、ティムタムやアンザックのビスケット等が有名であるということだが、後者は第一次大戦時、オーストラリアとニュージーランドの同盟軍が食べていたビスケットであるという。その他、コーンフレークビスケット、ハバロフ等も美味しいし、おみやげとしてハチミツもお勧めということであった。

18 時半過ぎに、バスのすぐ前の道路をカンガルーがピョンピョンと横切っていったが、そろそろ涼しくなってきたので活動を始めたらしい。その後も野生のカンガルーが出没するのを期待して車窓から目を凝らして見ていたのだが…。

パースの街に戻ってきたのはちょうど日没の頃。この美しい街を夕焼けが包みかけていた。スワン川に臨む中華料理店での夕食となったが、この店の 2 階から残照を満喫した後の食事は結構おいしかった。



(スワン川に沈む夕日 パースの残照)

ホテルに戻ると TV で「タイムマシン」をやっていたので、荷物の整理をしながら見ていると、ブラピ主演の「トロイ」を近日放映予定で、その案内が流されていた。ピアーズ・ブロスナンの後任のジェームズ・ボンド候補に上がったという豪の俳優であるエリック・バナもトロイのヘクトル王子役で出ているが、オーストラリアでも人気があるのだろう…などと思いながら…連日の寝不足で、22 時 40 分には就寝してしまった。

1 月 2 日（土） 晴れ

6 時半にモーニング・コールで 7 時から朝食となったが、今朝も自ら焼くワッフルが美味しかった。

スーツケースをバスに積み込み、8 時 18 分に出発し、モンガー湖には 10 分足らずでの到着となった。この真水の湖は鳥が多く、名物の黒鳥も数羽見られ、優雅に泳いでいる姿を見ることができた。初めてパースにやって来たヨーロッパ人が黒鳥を見てビックリしたことを、だいぶ以前の「世界・ふしぎ発見！」で知ったが、白鳥が黒鳥 (black swan) なのだからその驚きは大層なものであったに違いない。

湖面を渡る風はとても爽やかで気持ちよかったが、ふと、この湖の風景は水戸の千波湖のそれとよく似ていると感じた。モンガー湖から望む高層ビル群と周囲の緑が、銀色に輝くアートタワー水戸と間近の偕楽園の風景と重なって、奇妙に相似しているように思えた。



(爽やかなモンガー湖 彼方に高層ビル群を望む 何となく黒鳥にも優雅さを感じる)



(水戸の千波湖の風景 輝くアートタワー水戸と白鳥と黒鳥)

水戸の千波湖も水鳥が多く、メード・イン・オーストラリアの黒鳥も 58 羽ほど存在しているということだ（上の写真は水戸の千波湖です）。

強い陽射しにも係らず、モンガー湖の爽やかさは世界一美しい街といわれるパースをより効果的に修飾しているように感じられた。何かホッとするような安らぎが、この湖には感じられた。うちの近くにもこのような湖があったらなあ〜。



(爽やかなモンガー湖 朝早いせいか、他の観光客はほとんど見られなかった)

モンガー湖を後にしてキングスパークへ向かうバスでは、恵美子さんからオーストラリアの教育についての説明がなされた。豪では 18 歳、高校までが義務教育で、その後 30%が現役として大学に進学し、ワーホリや世界一周貧乏旅行等に行ったりする者も多いという。また、2 年間の州立の職業訓練校（短大のようなもの）もあって、資格が取れるので最近では人気があるそうだ。

8 時 50 分に赤いユーカリの花の脇を通過してキングスパークに到着した。西オーストラリア州の初代知事であるジョン・フォレストの像、ノーザンテリトリーで採って移植されたバオバブの木、たくさんの木々と花々が迎えてくれた。

大晦日の夜景ツアーで訪れた時と異なり、この公園の輝く緑、抜けるような青空と海の入江のように穏やかで青く光るスワン川、そして彼方には内陸部へ続く山・丘陵、その間に位置する美しい街パース…古い建物と高層ビル群が違和感なく共存している風景…には思わず感動してしまった。404ha もの広大な敷地に 250 種類以上の植物と 100 種類以上の野生動物が保護されているというこの素晴らしい公園が、市内から車でわずか 5 分足らずのところに存在することにも驚かされてしまった。

バオバブの木は、以前ジンバブエのビクトリアフォールズで見たのと似てい

て、マダガスカルにあるような背丈の高い種類のものとは異なっていた（マダガスカルのパオバブが特殊なのだろう）。それにしても陽射しが強くて暑いので、夏休みに来ているのかと錯覚してしまうほどであった。



（赤いユーカリの木　初代知事のジョン・フォレスト像　パオバブの木はジンバブエ以来！）

ジョン・フォレストによって、街を一望できるこの地の個人所有が禁止されて広大な公園建設が進められたという話だが、確かに、都市と豊かな自然との調和・共存というのが図られなければ健全な社会とは言えないだろうし、人間のメンタル面のサポートには、このような緑豊かで心が安らげる公園が身近にあることが望ましいと言えよう。特に、現代の日本は複雑な社会環境になってしまっているのだから、なおさらである。

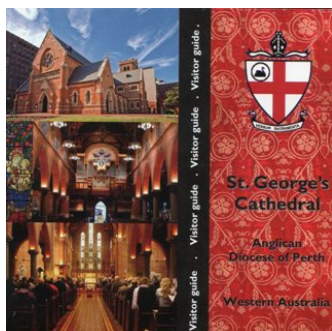


（緑豊かなキングスパークは市民の憩いの場　かわいい真遊さんと2ショット）



(赤いユーカリ エリザベス女王によって 1954 年 3 月 27 日に植えられた木 植物園の案内)

9 時 40 分に市街地に向けて出発し、ほどなくして聖ジョージ大聖堂に到着した。1841 年に小さな教会として設立され、その後に、英国国教会の威信をかけた大聖堂として改装されていったという。内部はステンドグラスが美しく、荘厳な雰囲気が形成されていた。



(大聖堂のパンフレット 外部は落ち着いた色調、内部は美しいステンドグラス)



(オーストラリア産の鉱物が刺さっているオブジェ 3 匹のカンガルー像)

大聖堂を後にし、聖ジョージテラス通りの向こうに串焼きのようなオブジェ

があり、長い串にはオーストラリアで産出される鉱物が刺さっていた！また、その横には 3 匹のカンガルーの像があり、高層ビルが建ち並ぶこの通りのオアシスのようになっていて、余裕のある街づくりがなされているのを感じた。



(ロンドン・コート)



(ランチをとったホテル)



1936 年に造られたロンドン・コートは中世のヨーロッパにタイムスリップしたような雰囲気クラシックなアーケードで、鞆や靴、洋品の他、種々のお土産店が軒を連ねていた。まだ朝早いせいか比較的空いていたので、短い距離のアーケードを行ったり来たりしていろいろな店を覗き、数枚の絵ハガキを購入した。また、近くのスーパーマーケットで、お目当てのラミントン（ココナッツケーキ）もゲットすることもできた。

その後、オパール店に案内され、オーストラリアは全世界の 90% のオパールを産出するという話から、ホワイトオパールは全体の 90%、色の濃いブラックオパールはレアで価値が高いと説明された。また、クィーンズランド州で採れるボルダーオパールは、茶色い鉄鉱石の表面にオパール層が長い年月を経て張り付いて形成されたもので、珍しいけれどブラックオパールよりもちょっと安価であるということであった。へえ～そうなんだア～！

11 時 40 分になると、オパール店の道を挟んだ対面のホテルのレストランでランチとなった。ビッグサイズのチキンバーガーは中々美味しかった。



(われわれの青いバスと美しいパース市内の風景)

12 時 30 分に出発して、フリーマントルに向かった。パース市街を車窓から改めて眺めると、建設中のビルがたくさん見られ、恵美子さんが話していたバ

ブル真っ最中といった感じであった。世界的な経済不況のなかで、中国資本が投入されているためか、その影響はほとんど受けていないように思われた。



(旧市庁舎 世界的不況のさなか、建設ラッシュのパース市街地)

輝く青空の下、ヨットハーバーを左手に見ながら鉱山や大農場のオーナー達の住む高級住宅街を縫うように、少しくねくねしたビクトリア・アベニューを進んだ。広い庭やプールを有しているものも多いという。このようなパースの山の手地区に住める人たちは、素晴らしい眺望と美味しい空気といった本来人間が必要なものを有している訳だから、生活の質 QOL が高いだろうなあ(^^♪



(パースの高級住宅街の家々)

ヨットハーバーの向かい側には、パースに5つある大学の一つで1911年に設立された伝統と歴史のあるUWA（西オーストラリア大学）があり、鉱山学部が最難関という話であった。特に、鉱山経営は難しいということである。こちらで採れるボーキサイトやウラニウム、オパール等の、採算を考慮した経営っていうのは、確かに難しいに違いない。

幹線道路（クィーンエリザベス・ストリート）に出ると、右手にインド洋が見え、彼方にはロットネスト島も望むことができた。少し霞んで見えたが、ロットネスト島までは随分と遠いように感じられ、え〜っあんなに遠いのオ〜！船酔いは大丈夫かなあ〜と、ちょっと心配になってしまった。

パースの海の玄関口ともいえるフリーマントルは、パースの南西20km弱にあり、キングスパークを造ったジョージ・フォレストによって建設された港町であり、イタリア人が多く移り住んでいるという。スワン川の河口を横切る道路の両側が港になっていて、日本からの漁船の寄港も多いとのこと。南極観測隊が南極に向かう前の最後の寄港地になっていて、隊員達はここで5日間程休

養をとってから、南極にアタックするという。



(パース駅)



旧刑務所のラウンドハウス



駅の上に黒鳥でなく白鳥の像が置かれているパース駅を抜け、海沿いの突き当たりにあるラウンドハウス（旧刑務所）へは 13 時 15 分に到着した。1830~31 年に石灰岩で建設されたアボリジニー用の刑務所で、それほど広くなく 40~50 人程度用で、ここが一杯になるとロットネスト島に連れていったそう。



(ハイ St はこの町が目抜き通りだが、閑散としていた 軍事基地の島ははるか彼方)

ラウンドハウスの入口で町の方を振り向くと、ハイ・ストリートに沿って市役所、その隣が教会…その先の展望台から望むと、沖合には軍事基地がある島があり、そこから米軍機がイランやイラクに飛んでいくという。

海風（シーブリーズ）が気持ちよく、しかしここではシーブリーズと呼ばず「フリーマントルドクター」と呼ばれているそう。この海風が吹くと気温が 2~3℃下がって心地よいという。ドクターとはナイスネーミング！



(タイムガンと掲げられている種々の旗)

展望台には時刻を告げるタイムボール、タイムガンがあり、掲げられた旗は左からオーストラリア国旗、西オーストラリア州旗、アボリジニーの旗、フリ

ーマントル市の旗…。黒と赤に黄色い○印がアボリジニーの旗だが、どのような意味があるのだろうか？

フィッシング・ボート・ハーバーを抜けて 4~5 分程歩くと、今夜のホテル、エスプラネードはすぐであった。



(たくさんのボートが停泊しているハーバー ホテルにはサンタクロースが)

エスプラネードホテルはこの町一番とも言える高級ホテルで、ロビーも広々としていて、部屋も広くて快適であった。屋根の上には登ろうとしているサンタクロースの人形がいて、暑いのにご苦労様という感じであった。

チェックインの後、15 時より TC の棟居さんの案内で、ホテル脇のエセックス通り～フリーマントルマーケット～サウステラス～フリーマントル駅と散策した。



(週末のフリーマントルマーケットは人も多くて活気があった)



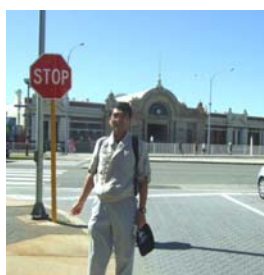
マーケットにはカーペットや蝋燭、アロマ、T シャツをはじめ種々のお土産品も売られていた。また、野菜・果物やパンケーキ、寿司、ラーメン店等もあった。揚げ餃子入りのラーメンを食べている現地の若者（高校生？）がいたが、しつこそうで僕はダメ。あんなの食べたら胸やけしちゃうよ！ノーサンキューです(笑)

さらには手相やタロット占い等の店もあって、将に種々雑多なものが集められているが、さすがにナマ物はなく、東南アジアのマーケットのような異様な臭さはなくて…ありがたかった。

週末ということからか、マーケットの横の道路では大道芸人が迫力ある芸を披露していて、思わずモロッコのジャマエル・フナ広場を思い出してしまった。

(当 HP の「モロッコ幻想紀行～プライスレス・メモリーを求めて」をご参照ください！)

この町には雰囲気のあるカフェやパブが多いということだが、特にサウス・テラスにはこれらが集まっており、通称“カプチーノ通り”と呼ばれている。



(カプチーノ通り フリーマントル駅の上には白鳥の像がのっている)

フリーマントルの駅は 1900 年代に建設されたフェデレーション様式で、そこで解散となり、独りブラブラと散策をしていると、教会で結婚式が行われていたのでちょっと覗いてみた。教会の前に新郎新婦が並んで、何やら皆と話し込んでいて、かといってバチバチと写真を撮るわけでもなく…週末の夕方なのんびりした感じの結婚式でした。1 月 2 日は仏滅なんだけど、オーストラリアでは関係ないよね(笑)



(真夏の結婚式はちょっと暑そうでした のんびりした田舎の結婚式という感じ)

その後、町なかにあるいくつかの歯科医院の看板や診療案内を見て廻った。週末の午後なのでどこも休みであるが(うらやましい!), 3 軒とも診療所は金曜の午後から土日が休診日になっていた。そのうち 1 軒は金曜も朝から休みで、毎週 3 連休! 日本の歯科事情と随分違って、とっても優雅だ~!! 診療体系やテクニックとも、絶対に日本の方が優っているのに~。 命を削ってアク

セクと仕事をしている我が国の歯科医療の現実を考えると、まるでパラダイス！



（3軒のクリニックを見たが、どれも休みが多くて優雅であった！）



（こちらではバーガー・キングがハングリー・ジャックになっている）

ホテルに戻ると、パースのロンドン・コートで購入した絵はがきを書いてフロントに出した後、17時50分にロビーに集合して夕食に向かった。少し歩いた港に面した“Joe’s Fish Shack”はカジキや船の飾り等のインテリアが素敵なShack(丸太小屋)で、クラムチャウダー（白いクリームスープなのでニューイングランド風、因みに赤いトマトスープはマンハッタン風である）とHake（メルルーサ～タラの類の白身魚）という魚のフィッシュ&チップスは中々おいしかった。

この店には日本人の店員がいたので、いろいろ話を聞いてみると…彼は19歳で、Edith Cowan Universityで教員になるための勉強をしていて、休みの間はアルバイトで頑張っているという。両親とも自衛隊にいたが、彼が1歳の時にこちらに移住したのだそうだ。現在、父親は日本語教員、母親はこちらで免許を取得して医師をしているという。ふう～ん、いろいろな人生があるんだなあ…。彼に、日本語・英語のバイリンガルでいいね！と言ったら、英語の方がパーフェクトで、日本語はちょっとわからない言葉が…との回答であった。そういえば、魚のHakeについて質問しても、彼は日本語ではどう説明したらいいのか分らないということであった。



(夕食をとったレストランとクラムチャウダー 夕闇につつまれる同レストラン)

夕食後は砂浜に行き、インド洋の夕焼けをしっかりと堪能した。とてもロマンティックな夕焼けで、何かいいことが起こる予感がした（宝くじが当たるとか！）インド洋の夕焼けと言えば、松田聖子の「セイシエルの夕日」を思い浮かべてしまう。“世界のどんな場所で見るとも 美しい夕焼けよ ♪～” うん、確かにインド洋の夕焼けは美しい～(^^)v



(インド洋の夕焼け)

夕焼けが終了し、夜の帳が下りるまで、しっかりと堪能していたが、フリーマントルドクターのおかげで、ちょっとひんやりとする感じもした。

20 時頃にホテルに戻ると、TV ではクリケットをやっていた。ルールもよくわからないし、何でこんなゲームが面白いんだろう？野球の方がスピーディーでずうっと凄いよね！

TV では今夜は「JAWS」をやっていたが、明晩は「ダイ・ハード」だって！

1 月 3 日（日） 晴れ

Happy Birth Day! 今年も海外で誕生日を迎えられ、とてもハッピーである。あ～、でも、もう 52 歳にもなっちゃったよ(^^) おじさんになっちゃったなあ～。

今日も強い陽射しで、最高気温は 39℃にもなるということだ。ゆつくりと朝食をとった後、9 時 40 分に出発となった。5~6 分程でロットネスト島行きの船が発着する港に到着した。当初は 10 時発のを予定していたのだが、10 時 15 分発の船で行くことになったので 15 分程の自由時間となった。すぐ近くに停泊し

ている帆船は内部が見学できるようになっており、\$5の入場料金をとっていた。白人観光客が多くて混雑していたので内部見学は止めにしたが、この帆船は練習船として使用され、実際にインドネシアの方まで航行しているということである。



(展示されている帆船は観光客でいっぱいであった トムソン湾に停泊するクルーザー)

船の2階席に座ると、船酔い予防のために隣席の英国人と会話をして過ごした。シンガポール経由で来たというこの英国紳士は、オーストラリアは初めてで、3泊ずつで、メルボルン、シドニーと巡って行くという。日本には行ったことがないとのことで、逆にいろいろと質問されてしまったが、京都がお勧めという話で落ち着いた。

一見、ベタ風に見えるインド洋であったが船は結構ゆれ、10時50分にロットネスト島のトムソン湾に到着した。10数年前のグレートバリアリーフのクルーズ時の物凄い船酔いが脳裏にこびりついていて不安だったが、話をしていたことで気が紛れ、何とか無事だったのでホッとした。



(昔の塩の倉庫が博物館になっている ランチのレストラン～歩いている人の顔に注意！)

昼食場所のレストランに12時集合ということで、しばらく自由時間となった。自由時間といっても、ちっぽけなマーケットと観光客向けの店が数軒あるのみで、暑くてハエが多くて参ってしまった。現地の人や、サイクリングを楽しんでいる地元の人たちは、顔にハエよけの網を被っているのが可笑しかった。

コバルトブルーに輝くインド洋を挟んで、25和先にパースの高層ビルが見えるのが、オーストラリアっぽい感じであった。

トムソン湾にはパースの人々のプライベートクルーザーがたくさん停泊しているが、この島に来てビーチで遊んだり、サイクリングを楽しんだりすること

が、娯楽の少ない？こちらの人たちの大きな楽しみなのであらうと思われた。

船着き場の正面は昔の塩の倉庫で、島内にある塩湖で採れる塩を保管した所で、現在は塩を中心としたこの島の歴史を展示する博物館になっている。ちょっと覗いてみたが、昔の島の様子や採取された塩の写真等が展示されていて、ちっぽけな建物だったので、本当にちょっとの時間で見学終了となってしまった。

12時からランチとなったが、ガイドの恵美子さんから「みなさんの中で、水着を持ってきている方いますか？」との質問…。このレストランからゆっくりと北に15分程歩いたところのベイスン（Basin）ビーチがとても美しく、海水浴にも適しているということであつた。

昼食後の12時50分に、島内の掲示地図を参考に、デジカメで地図を撮影して道に迷わないよう注意しながら、独りでベイスンビーチに向かった。到着してビックリ！将に地上の楽園、パラダイスといった感じの美しいビーチであつた。こんなところに一人で来るなんて…(T_T)



(地図を参考に島内を散策した ベイスンビーチはとっても美しくて splendid！)



(このビーチの美しさは筆舌に尽くしがたい！ 水着がなかったのが残念でした～)

地元の人？オーストラリア人？ばかりなのかなあ～と思っていたら、マレーシア在住でバケーションに来ているという日本人の家族がいて、写真を撮ってもらっちゃいました(^^)v

このようなビーチは、将に知る人ぞ知るといった感じだと思うけれど、ちょっと日本ではお目にかかれないような素晴らしさ…、何度も言うけど独りで来るなんてもったいない！でもちょっとハエが多すぎ！ハエがいなければパラダイスということだね(^o^)



(このビーチは平らな岩でプールのようにになっている所があり、泳ぎやすそう！)



(こんな美しい所におじさん一人で来るなんて、すご〜く残念！寂しい！)

レストランに戻ると、14時から島内バスツアーのスタートとなった。ドライバーはシェリーさんで、ジェニーに比べると大人しそうな感じの女性ドライバーであった。少し走ると、フライング・ドクターの発着する小さな飛行場があり、数機のセスナが停まっていた。その辺りには、大陸では絶滅してしまったが、この島に1万頭ほど生息しているというクオッカが見られると言うのでバスが停まり下車すると、メルルーカの木の下に数頭いるのを見つけた。ベイスンビーチへの行き帰りの際にも数多くのクオッカを見かけたが、近づいてもあまり驚かないので、何枚も写真を撮ることができた。



(そうそう、ベイスンビーチには美女たちもいましたよ！ フライング・ドクターのセスナ)

この島に最初に来た白人（オランダ人のウィリアム何とかという）がクオッカを大きなネズミ（ラット）と勘違いして、ラットの巣（ネスト）の島“rat's nest”（ラットネスト）と命名したのが、訛ってロットネストとなったのだという。オーストラリア人の発音はいい加減な感じだから、比較的早くそのように訛っ

て変化してしまったと思われる。



(かわいいクオッカはたくさん見ることができたが、左はナイスショット！)

飛行場の近くには、以前はそこから塩を採っていた塩湖があったが、海水の 5 倍くらいの塩分濃度ということであった。もしかしたら、あの死海くらいの塩分で身体が浮いちゃうかもしれない。

この島の人口は 200 名ほどで、ほとんどが観光関係というが、彼らが住んでいる村を抜け、両脇にペパーミントツリーが植樹されている道を進み、軍隊が使用していたという鉄道の線路を渡った。しばらくするとポーポイズ湾に出て、紺碧の海が眼前に広がる美しい風景を眺めることができた。遥か彼方にパースの高層ビル群を確認することができ、トド島、沈没（座礁）した船を見ながらリトルサーモン湾を目指して進んだ。

14 時 20 分にパーカーポイントで下車して、撮影タイムとなった。たくさんのクルーザーが停泊していて、紺碧・エメラルドグリーンの海に白い船体が映えて美しい眺望であった。

10 分程進んで、今度はリトルサーモン湾で下車すると、そこでは海水浴を楽しんでいる人もいた。



(パーカーポイント)



(リトルサーモンベイ)

14 時 40 分にサーモン湾に入ったが、ここはサーモンがたくさん集まるといことからこの名が付いたという。サーモンを狙って、この辺りにはイヌワシが多いということであった。



(ロットネスト島の地図 2つの灯台と塩湖、数々の湾や岬が表示されている)

灯台近くにはサイクリングを楽しんでいるオーギー達がたくさんいて、また、この島にはたくさんのクルーザーやヨットが停泊していることも合わせると、こちらの人々の休暇の楽しみ方ってシンプルなんだなあ、とか思ってしまった。要塞の大砲は遥かパース市街まで届くほどの長い射程距離であったそう。



(灯台と要塞 日本海軍の潜水艦の攻撃用に、要塞には大砲が備え付けられていたという)

このような所に来て第2次大戦の遺物に出会うなんて思いもしなかったけれど、当時の日本海軍は恐れられていたんだなあ実感させられた。吉村昭の小説『海の史劇』に、明治37年にフィンランド湾の奥にある軍港から出航したバルチック艦隊が、バルト海を抜けてスウェーデンとデンマークとの間の狭い海峡を通過する際に日本海軍の潜水艇・水雷艇によるゲリラ攻撃を神経質過ぎるほど警戒したという話が載っているのを思い出した。実際は日本の諜報機関が同盟国イギリスの協力を得て流した偽情報であったのだが、いずれにしろ帝国海軍は強かったんだね。

この灯台は1990年の終わりまで灯台守が住んで管理されていたが、そのお爺さんがリタイアした後は電氣化して無人になったそう。

灯台と要塞を後にすると、ストリックランド湾～ウィルソン湾を左手に見な

がら進んだ。



(湾には必ずクルーザーやヨットが停泊していた　メルルーカの木は低くなっていく)

この島の西へ行くほど風が強くなり、メルルーカの木（こちらではブロッコリーの木という愛称で呼ばれることが多いという）は海風に吹かれて傾いて、だんだんと低木になっているのが確認できたが、その姿は確かにブロッコリーに似ていて納得した。

15時にウェストエンド（最西端）に到着した。南アフリカのケープタウンに似た感じの岬になっていて、遊歩道（木道）を歩いて突端まで進んだ。ヘビが出没するので、この木道からは絶対に出ないようにとの注意があり、足元を少し注意しながら歩いたが、ヘビはこの辺りに産みつけた海鳥の卵を狙っているということである。南氷洋とインド洋とから吹きつける強い風と荒々しい波は、猛々しさを感じ、ホッとするというよりも、ちょっと身構えてしまう程であった。この先には日本のマグロ漁船（Kiyo Maru）が難破し、まだその錨が残っていると言う。



(この島のウェストエンドは風も強く、喜望峰に似た感じであった)

15時17分にバスは出発し、島の北側の道を走って進んだ。この辺りの海にもサメが出没し、毎年2～3名の犠牲者が出るそうだが、彼らはサーモンやトドの赤ちゃんといった脂肪の多いものを好むので、太った人は要注意という話であった。また、できるだけ派手な水着を着ることもサメよけとして効果的？ということ恵美子さんが話していた。

サンフランシスコ行きの船（City of York）が沈没したシティオブヨーク湾を過ぎると風力発電の設備が目に入ったが、これらは海水を真水にするために使

用される電力供給用であるという。さらに、ジョーディー湾に面したロッジは大人気で、2年先まで予約がギッシリということであった。恵美子さんが、次にこの島に来る時はぜひ泊ってみてくださいと言っていたが、ちょっとムリ～！でも、このような何もないビーチでのんびり過ごすのは、半日くらいならともかく、すぐに飽きてしまうだろうな。

バスの右手には赤い色をした塩湖があり、この赤いのはエビの色素だというのが、こんな塩分の濃い湖にも生息できる強いエビがいるんだと感心してしまった。また、少し先に少年院だったという建物があり、かつて英国政府は私生児が生まれるとオーストラリアに送還したとのことで、彼らが生活した建物だということであった。

15時35分にトムソン湾に面した船着き場に戻ったが、乗船時に遙か彼方のパースの高層ビルの左手方向に煙が上がっているのを発見した。恵美子さんに“あれはブッシュ・ファイヤーですか？”と聞いてみたら、“さすが鹿島さん、鋭い観察眼ですね、ブッシュ・ファイヤーの煙です”との答えだった。煙が上がっているのを実際に眼にすることができたが、ブッシュ・ファイヤーというのは結構頻繁に起こっているものと思われた。

16時ジャストの船でロットネスト島を後にした。船内のビデオで「モーレッツギリガン」（ギリガンズ・アイランド）をやっていたが、とっても懐かしかった！！小学3～4年生の頃、日曜の朝、フジTVでやっていたのを楽しみに見ていた記憶が蘇ってしまった！確かこの後に「じゃじゃ馬億万長者」も続けて見ていたと思う。“おっちょこちょいのギリガンと～頼もしい船長♪～お客さんを乗せて海の上～”という主題歌も自然と口から出てしまった（笑）それにしても、40年以上も前のアメリカのB級コメディーを流すなんて、オーストラリアのカントリーっぽさが出てるね～(＾o＾)

40分程でフリーマントルに到着したが、下船の際に、行きに隣席だった英国人と遭遇し、お互いビックリしてしまった。島内では同じような行程で回ったに違いない。



(ホテルで恵美子さんと2ショット！何歳になっちゃった？本当に頼もしいジェニー)

16時30分にホテルに到着し、18時半まで自由行動となった。日曜日という

ことで開いている店があまりなかったけれども、閑散とした町をブラブラ散策しながらお土産用のTシャツとかを購入して18時10分にホテルに戻った。

8時30分からホテルのレストランでバイキングの夕食となったが、その際、“本日お誕生日の方がいます！”と棟居さんからバースデーケーキとプレゼント（アボリジニアートのカレンダー）を頂いた(*^^)v

ケーキはとても大きく、また、ちょっと苦手なレアチーズだったので全部食べきれなかった～ごめんなさい m(_ _)m

19時半にホテルを出発して、一路、空港へ向かい20時15分に到着した。到着前に、棟居さんから恒例の“マイクを握っての最後の挨拶”があり、本来はアジア、特に中国担当なので、中国に行かれる時はよろしく！ということを確認していた。黄龍や麗江とか行くときにはお願いしちゃうかなあ♡♡♡

お別れの際に、ジェニーと写真を撮ったが、やっぱり遅いね！

搭乗手続きの際にパスポートを見せ、今日1月3日は誕生日だと言うと、僕の顔をじーっと見てニヤッと“Baby face～！”って大笑いされちゃいました。あの係員のお姉さんは僕より若いアラフォーだと思うけど、日本人は赤ちゃん顔でバカにされるのね～(^^ゞ でもすかさず“Happy birthday to you ♪～”と歌って祝福してくれましたよ！

22時05分発のQF79便は、出発直前に“エンジンに異常なノイズが生じている”という怖い説明があり、緊急整備が入って、結局1時間近くも遅れて23時に離陸となった。

1月4日（月）晴れ

帰りのフライトは気流のせいか何度が大きな揺れがあり、もしかしたら、あのノイズが！という不安も生じ、それに客室乗務員がすべて男で、しかも皆大柄なメタボときては、通路側に座った身としては通る度に威圧感を感じてしまい、よく眠れなかった。

日本時間の朝8時40分に、機長から“あと1時間程で到着しますが、成田の気温は1℃、曇りのち晴れで…”1℃ということは、昨日のパスとは30℃以上も…！とビックリ(@_@)してしまった。

9時36分に無事に成田空港に着陸。やっぱり寒～い。また厳しい現実が待っているんだなあ(^_^;)。

あとがき

旅に求めているものは一体何だろう。少し前までは“出会い”と即答した筈である。それが今や“癒し”になろうとしている。僕が旅に出るのは“癒し”を求めているからに他ならない。今の僕にとって、旅に出ることこそが、日々の忙しさ、厳しい毎日の生活から癒される唯一の行為なのかもしれない。

今回の旅行では、特にパースのキングスパークからの眺望一空とスワン川の青さと、公園の緑—の素晴らしさは疲れた心身に潤いを与えてくれた。また、ウェーブロックまでの行き帰りには、オーストラリア内陸部の風景を十分に味わうことができ、僕の好奇心を満たしてくれた。そしてインド洋の青さとシーブリーズ、フリーマントルドクターが、これらの光景をさらに修飾してくれて、結果として心の癒しに到達することができたと言えよう。

そうそう、パース夜景ツアーの朋子さんやTCの真遊さんといった美女たちからもたくさんのエナジーをもらって癒されたことを付け加えます(*^^)v